

安田財閥と地方銀行の系列化

— 八王子・第三十六銀行を事例に —

早 川 大 介

はじめに

- 1 明治後期の第三十六銀行
 - (1) 第三十六銀行の発足と展開
 - (2) 八王子貯蓄銀行の設立
 - 2 経営不振と安田系列銀行へ
 - (1) 安田銀行への救援要請
 - (2) 安田系列銀行へ
 - (3) 安田による経営再建と組織再編
- おわりに

はじめに

本稿の課題は、東京府八王子市に本店を置き、戦前期の多摩における有力地方銀行であった第三十六銀行を事例に、安田財閥の傘下にあった地方銀行（以下、安田系列銀行と表記）について分析することである¹⁾。

まず本稿の分析対象となる安田財閥と第三十六銀行について簡単に説明しておこう。安田財閥は、安田善次郎によって築かれた安田銀行を中心と

1) 本稿における「多摩」とは、東京府北多摩郡・南多摩郡・西多摩郡のいわゆる「三多摩」を指す。また、「地方銀行」という用語は、「都市銀行＝独占的大銀行」以外の銀行という意味で用いる（石井寛治「地方銀行の成立過程—地方銀行と都市銀行の分化」『地方金融史研究』第3号、1970年（のちに『近代日本金融史序説』東京大学出版会、1999年に収録）を参照）。

する「金融財閥」である。明治期から救済を通じて各地の地方銀行を傘下におさめ、地方金融に積極的に進出し、1920年代までに全国的な銀行網を構築した²⁾。一方、第三十六銀行は、1878年に谷合弥七ら八王子の生糸・織物商人らにより第三十六国立銀行として設立され、その後1897年に普通銀行に転換し、第三十六銀行となり、翌年、貯蓄部門として八王子貯蓄銀行を設立した。その後、経営不振のため1917年に安田系列銀行となった。1923年の安田系列銀行の大合同には組み込まれず、1942年に同じく安田系の日本昼夜銀行に合併されるまで八王子を中心とした多摩・神奈川・埼玉方面に店舗網を持つ地方銀行として活動した³⁾。

安田財閥に関する研究は、1974年刊行の『安田保善社とその関係事業史』の編纂過程で収集された史料を利用して、1970年代半ばより本格的に開始された。浅井良夫は、都市銀行の実証研究を進める過程で、安田保善社および安田銀行とその銀行網に関する先駆的な研究を行った⁴⁾。安田財閥の研究は、その特徴である金融業と地方金融への積極的な関与から、

-
- 2) 安田財閥および安田善次郎に関しては、由井常彦編『安田財閥』日本経済新聞社、1986年、由井常彦『安田善次郎』ミネルヴァ書房、2010年を参照。そして、安田財閥の金融業に関しては、安田不動産株式会社『安田保善社とその関係事業史』、1974年、富士銀行調査部百年史編さん室『富士銀行百年史』、1982年が詳しい。
 - 3) 本稿の第三十六銀行に関する記述は、筆者が金融関係のパートの執筆を担当した八王子市史市史編集委員会編『新八王子市史』通史編5近現代(上)、2016年を基礎にしている。また、国立銀行時代については、早川大介「八王子第三十六国立銀行の設立と展開(1878-1897年)」愛知大学『経済論集』第213号、2020年を参照。
 - 4) 浅井良夫による安田財閥研究は以下の通り。①「戦前期日本における都市銀行と地方金融」『金融経済』154号、1975年、②「地方金融市場の展開と都市銀行一岐阜県下大垣共立・十六両行を中心として」『地方金融史研究』7号、1976年、③「安田財閥と地方銀行一群馬商業銀行・明治商業銀行を中心にして」朝倉孝吉編『两大戦間における金融構造』御茶の水書房、1980年、④「安田貯蓄銀行と安田財閥」成城大学『経済研究』77号、1983年、⑤「安田金融財閥の形成」成城大学『経済研究』84号、1984年。なお、浅井は、前記①～⑤を基礎としながら、前掲由井編『安田財閥』のなかで安田の「金融財閥」としての展開を論じた、第2章「保善社と安田関係金融機関の発展」、第4章「金融財閥としての確立」を執筆している。

都市金融市場と地方金融市場の連関についての分析が射程に入り、都市銀行の研究と同時に地方支店や系列地方銀行の実証分析を通じて地方金融史研究の進展に大きく貢献した⁵⁾。

本稿の対象となる第三十六銀行は、戦前の多摩における最古の銀行であり、同じく1942年に日本昼夜銀行に合併された青梅の武陽銀行とともに多摩の中核的な地方銀行であった。また、東京府内の地方銀行では最も遅くまで活動していた銀行の一つである⁶⁾。第三十六銀行については、前掲『安田保善社とその関係事業史』および『富士銀行百年史』で沿革と系列化前後の状況が若干述べられているが、その実態については、ほとんど明らかになっていない⁷⁾。同じく安田系列銀行の大垣共立銀行、四国銀行は

-
- 5) 浅井良夫の一連の研究以降の安田系金融網に関する研究の展開は、管見の限り以下の通りである。高嶋雅明は、満洲における日清合弁銀行である正隆銀行の研究をおこなった（『正隆銀行の分析—満洲における日清合弁銀行の設立をめぐる』和歌山大学『経済理論』第198号、1984年）。また、齋藤憲は、1922年に浅野から譲渡され安田系となった日本昼夜銀行について分析している（『浅野昼夜銀行の安田財閥への譲渡』大阪経済大学日本経済史研究所『経済史研究』第6号、2002年）。迎由理男は、2000年代以降、一次史料を利用して精力的に安田銀行および系列銀行による活動実態を明らかにした。迎による安田研究は以下の通りである（『合同後の安田銀行—預金・貸出分析を中心に』『地方金融史研究』第33号、2002年、「戦時期における安田財閥の経営組織」北九州市立大学『商経論集』39(1)、2003年、「戦時期の安田財閥—安田保善社の投資活動と資金調達を中心に』『商経論集』40(1)、2004年、「戦時銀行統合と安田保善社』『地方金融史研究』第36号、2005年、「戦時期の安田銀行』『商経論集』41(1・2・3)、2006年、「明治期における安田銀行の資金運用—安田銀行『稟議簿』の分析を中心に』『商経論集』45(1・2・3・4)、2010年、「明治期における安田銀行のビジネスモデル」(粕谷誠・伊藤正直・齋藤憲編『金融ビジネスモデルの変遷』日本経済評論社、2010年所収)、「福岡銀行の成立過程—安田保善社と戦時銀行統合」荻野喜弘編著『近代日本のエネルギーと企業活動』日本経済評論社、2010年所収)、「安田銀行と製糸金融』『商経論集』46(1・2)、2011年、「安田財閥の対外投資—正隆銀行経営を中心に』『商経論集』47(1・2)、2012年)。
- 6) 1941年末の東京府に本店を置く普通銀行は13行であり、内訳は東京市内の11行（第一・三菱・三井・安田・第百・第三・昭和・十五・日本昼夜・高田農商・東京中野）と多摩の2行（第三十六・武陽）であった（大蔵省銀行局『銀行総覧（第48回）』）。
- 7) 前掲『安田保善社とその関係事業史』466-467頁、前掲『富士銀行百年史』162-163頁。

安田銀行に合併されずに終戦を迎え、戦後の財閥解体後は安田系列から離れて地元の地方銀行として存続したのに対し、第三十六銀行は戦時下の銀行合同で日本昼夜銀行を経て安田銀行に合併されたことによるところが大きいと思われる⁸⁾。中核的な地方銀行がともに都市銀行＝安田銀行に合併され、本店を置く銀行が消滅した戦前期の多摩の地域金融の実態はほとんど明らかになっていないのである⁹⁾。

本稿では、第三十六銀行が八王子の地元資本による地方銀行から経営不振により安田系列銀行となる過程とその後の安田による経営再建について分析し、冒頭で課題として掲げた、安田系列銀行のケーススタディを提供するとともに、空白となっている戦前期の多摩の地域金融の一端を明らかにしたい。

以下では、第1節で1897年の第三十六銀行の発足から日露戦後の金融危機を経た1910年頃までの経営について、第2節で経営不振による安田への救援要請と系列銀行化の過程、安田による経営再建について考察する¹⁰⁾。

-
- 8) 地方銀行の社史は、当該銀行の会社史であると同時に前身銀行以来の地域金融史の性格を持っている。大垣共立銀行では、『大垣共立銀行百年史』1997年、四国銀行では『四国銀行百年史』1980年を刊行し、それぞれ戦前期の沿革が記述されている。
 - 9) 多摩の地域金融史に関しては、2014年に多摩信用金庫の協力のもとで多摩金融史研究会が発足し、戦前から戦後に至る多摩の銀行や信用金庫に関する研究が進められている。定例の研究会とともにたましん地域文化財団の刊行する季刊誌『多摩のあゆみ』第166号より「多摩の金融史」を連載されている(研究会の概要については、佐藤政則「多摩金融史研究と多摩信用金庫(多摩の金融史1)」『多摩のあゆみ』第166号を参照)。なお、多摩の明治期の銀行設立については、早川大介「地域が生んだ多摩の銀行(多摩の金融史2)」『多摩のあゆみ』第167号で概観した。
 - 10) 本稿は、前掲『新八王子市史』通史編5近現代(上)の執筆に際して収集した第三十六銀行の営業報告書を中心とした基礎的な史料による分析である。第三十六銀行が最終的に統合された安田銀行(戦後、富士銀行を経てみずほ銀行)の内部史料へはアクセスできていない。また、八王子市史の編纂の過程でも銀行経営に関わるまとまった史料は発見できず、八王子市内の家文書の中に営業報告書を数点発見できたのみである。本稿では、雄松堂マイクロフィルム、埼玉県立公文書館「埼玉銀行資料」に収録された営業報告書を利

1 明治後期の第三十六銀行

(1) 第三十六銀行の発足と展開

まず、第三十六銀行の発足から、1900年代の経営動向をみることにしたい。1897年2月、第三十六国立銀行は、営業満期国立銀行処分法により私立銀行（普通銀行）に転換し第三十六銀行と改称した（本店：八王子町横山64番地）。資本金は70万円（うち払込済は55万円）で、筆頭株主は第三十六国立銀行頭取の田野倉淳蔵（糸蘭商・質屋）であり吉田忠右衛門（質屋）がこれに続いた。初代頭取は、高齢の田野倉淳蔵にかわって吉田忠右衛門が就任し、その他の国立銀行時代の役員が留任した。国立銀行時代に開設した東京支店（日本橋区元浜町）と新たに1898年5月開設の飯能支店の担当の取締役として越智義路、小能正三が就任した（第1表・第2表）。第三十六銀行の店舗は、1907年8月、神奈川県橘樹郡稲田村登戸に稲生支店が開設され、東京府・埼玉県・神奈川県にそれぞれ1店舗の3店舗体制となった。

日清戦後の企業勃興のなかで多摩でも銀行設立が相次ぎ、日本の銀行数がピークを迎えた1901年末の多摩所在の普通銀行・貯蓄銀行は22行、南多摩郡は9行であった。当時、八王子において預金規模最大の銀行は、八王子第七十八銀行であった。同行は、1881年設立の八王子銀行を起源に持ち、1888年に大分の第七十八国立銀行を買収して八王子へ移転し、国立銀行に転じた。そして、1898年に普通銀行に転じて八王子第七十八銀行と改称した。同行は国立銀行を買収し、大阪にも支店を置くなど積極的な経営方針をとっていた¹¹⁾。第三十六銀行は、預金規模でみて八王子を含む南多摩郡、そして多摩全域でみて八王子第七十八銀行に次ぐ規模にあることが確認できる（第3表）。

用し、一部を『東京日日新聞』、『銀行通信録』掲載の決算公告等で補った。

11) 前掲『新八王子市史』通史編5近現代（上）148-151、251-253頁。

第1表 第三十六銀行役員(1)

氏名	住所	1898年末	1903年末	1908年末
○吉田忠右衛門	南多摩郡八王子町	頭取	頭取	頭取
○田野倉常蔵	南多摩郡八王子町	副頭取	副頭取	副頭取
○久保兵蔵	南多摩郡八王子町	取締役	取締役	取締役
○柴田弥市	南多摩郡八王子町	取締役		
越智義路	東京市麴町区	取締役	取締役	
小能正三	埼玉県入間郡飯能町	取締役		
小谷野貞助	南多摩郡八王子町	監査役		
柏木正直	埼玉県秩父郡名栗村		取締役	
山口朗貞	東京市日本橋区			取締役
小泉弥左衛門	神奈川県橘樹郡稲田村			取締役
渋谷定七	南多摩郡八王子町			監査役
天野清	南多摩郡日野町	監査役	監査役	監査役
山口安兵衛	南多摩郡浅川村		監査役	
双木八郎	埼玉県入間郡飯能町		監査役	取締役

出所：第三十六銀行『営業報告書』各期、商業興信所『日本全国諸会社役員録』各年版注：○は1897年下期の第三十六国立銀行役員。

第2表 第三十六銀行大株主・持株数(300株以上)(1)

1898年下期		1903年下期		1907年上期	
田野倉淳蔵	640	田野倉常蔵	800	田野倉常蔵	800
吉田忠右衛門	530	吉田忠右衛門	593	吉田忠右衛門	610
平沼伊兵衛	360	平沼伊兵衛	360	平沼伊兵衛	360
久保兵蔵	346	渋谷定七	333	渋谷定七	333
越智義路	340	久保兵蔵	300	八王子貯蓄銀行	310
		越智義路	300	久保兵蔵	300
				越智義路	300
総株数	14,000	総株数	14,000	総株数	14,000

出所：第三十六銀行『営業報告書』各期

第三十六銀行の主要勘定をみよう(第1図・別表1)。普通銀行転換直後の資金源泉は、預金中心ではなく、自己資本(払込資本金・諸積立金)と恒常的に借入金(再割引手形を含む)に依存していた。預金は、1906年まで

安田財閥と地方銀行の系列化

第3表 三多摩所在銀行一覧（1901年末）

単位：円

銀行名	所在地	頭取	資本金	うち払込	預金	諸貸付金
八王子第七十八銀行	南多摩郡八王子町	西川敬二	600,000	600,000	1,956,609	2,807,723
第三十六銀行	南多摩郡八王子町	吉田忠右衛門	700,000	700,000	656,766	1,805,437
武蔵銀行	南多摩郡八王子町	中藤弥左衛門	100,000	100,000	146,453	305,455
●八王子貯蓄銀行	南多摩郡八王子町	吉田忠右衛門	30,000	15,000	77,473	73,896
鴻通銀行	南多摩郡八王子町	落合喜四郎	50,000	50,000	32,035	78,690
町田銀行	南多摩郡町田村	鈴木弥右衛門	50,000	50,000	16,727	67,331
八王子倉庫銀行	南多摩郡八王子町	青木正太郎	100,000	25,000	8,275	11,080
●多摩村銀行	南多摩郡多摩村	市川太右衛門	50,000	15,000	5,494	15,932
●青梅銀行	西多摩郡青梅町	小澤芳重	150,000	120,000	84,863	234,919
五日市銀行	西多摩郡五日市町	土屋常七	120,000	120,000	32,351	206,328
羽村銀行	西多摩郡西多摩村	島田六助	50,000	50,000	7,887	25,588
●五日市貯蓄銀行	西多摩郡五日市町	土屋勘兵衛	30,000	7,500	5,283	7,717
水川銀行	西多摩郡水川村	木村源兵衛	50,000	50,000	4,423	58,532
成木銀行	西多摩郡成木村	佐藤谷五郎	50,000	25,000	2,553	26,185
小丹波銀行	西多摩郡古里村	原島甚三郎	50,000	12,500	92	20,013
調布銀行	北多摩郡調布村	井上平右衛門	100,000	35,000	43,343	55,505
多摩農業銀行	北多摩郡大神村	中村半左衛門	150,000	125,000	37,379	159,568
●府中銀行	北多摩郡府中町	島田竹三郎	200,000	62,000	30,223	111,010
●田無銀行	北多摩郡田無町	小山平太郎	100,000	25,000	23,743	39,111
拝島産業銀行	北多摩郡拝島村	宮岡與七	60,000	15,000	21,355	37,518

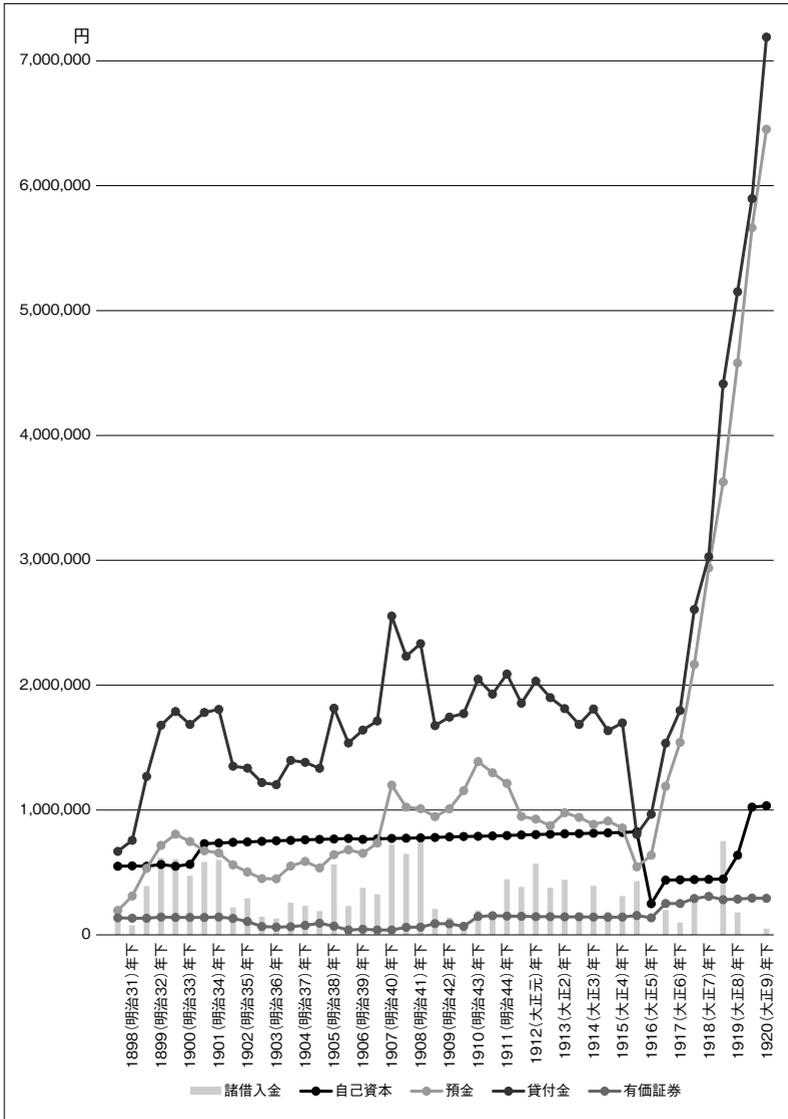
出所：『銀行総覧（第9回）』、『銀行会社要録（第6版）』。

注：●は貯蓄銀行および貯蓄銀行業務を兼営する普通銀行。郡別預金残高順。諸貸付金には割引手形を含む。由木貯蓄銀行、株式質会社は不明。

は50～60万円台でほぼ横ばいであり、1907年末に100万円を超え、ようやく自己資本を上回った（資本金70万円は1901年上期に全額払込済となった）。

一方、資金運用の中心は貸付金・割引手形であった。当時の貸付先の内訳は不明であるが、1902年の東京高等商業学校の調査報告書から手がかりを得ることにしよう。第三十六銀行は、「元来生糸商の機関銀行」であり「生糸商が急に資金の必要に迫るときは自己の生糸を担保に入れ」て借入を受け、「貸付金額は担保品価格の六割位」であった。そして「機業家は一般に資力薄く銀行に対する信用薄弱」であり、「生糸商が原料糸を機業家に売渡したる代金として受取る約束手形は何れの銀行に持参するも好

第1図 第三十六銀行主要勘定



出所：別表1より作成。

て割引するものなきため十中八九期日を待ちて現金を受」けとっていたという¹²⁾。こうした季節性の強い資金需要にこたえるために、恒常的に他銀行からの借入金に依存しており、手形の再割引でやり繰りしていた。後に傘下となる安田銀行との取引も1900年代からみられている。1894年から1904年の安田銀行の融資の際に作成された「稟議簿」の分析をおこなった迎由理男の研究によれば、第三十六銀行への融資はこの間に稟議回数3回で貸出極度額は3万円であった¹³⁾。

日露戦後の不況の中で八王子の中心的な地場産業である織物業の不振もあり、八王子の金融機関の活動は全般的に停滞していたが、1908年2月、八王子経済界を揺るがす出来事がおこった。2月1日、八王子第七十八銀行は、東京支店の手形交換戻3万円余の決済に差し支え、2月3日よりさしあたり20日まで休業に入ることとなった。八王子そして多摩最大の銀行であった八王子第七十八銀行の休業の余波は大きく、2月3日、第三十六銀行でも預金取付を受けた。本店での支払準備が不足し、資産家からの借入と東京支店から現金を取り寄せて払い戻しに対応した¹⁴⁾。

(2) 八王子貯蓄銀行の設立

第三十六銀行は、普通銀行転換に伴い、貯蓄預金業務を行う関連銀行を設立した。第三十六銀行の関係者は、1898年3月、貯蓄銀行条例に基づいて八王子貯蓄銀行が資本金3万円（全額払込済）で設立した（本店：八王子町横山53番地）。貯蓄銀行条例によれば、貯蓄銀行とは「複利ノ方法ヲ以テ公衆ノ為ニ預金ノ事業ヲ営」む機関であり、その預金は一口5円未満とされた。「複利ノ方法」は普通銀行でも一般化していたので、貯蓄銀行

12) 『八王子地方機業調査報告書』東京高等商業学校、1902年

13) 前掲迎「明治期における安田銀行のビジネスモデル」

14) 前掲『新八王子市史』通史編5近現代（上）257-260頁。「七十八銀行休業、三十六銀行の取付」『東洋経済新報』第440号、1908年2月、「七十八銀行破綻顛末」『東京日日新聞』1908年2月4日。

の特徴はその預金の零細性にあった¹⁵⁾。店舗は第三十六銀行の近隣に別途開設し、筆頭株主は第三十六銀行頭取吉田忠右衛門であり貯蓄銀行の頭取を兼務した、その他の役員も第三十六銀行との兼務が多かった(第4表)。

八王子貯蓄銀行の経営動向についてみよう(第5表)。資金源泉は、貯蓄預金を中心であり、徐々に増加し、1907年には20万円を超えた。貯蓄銀行も普通銀行と同様に定期預金や当座預金を取り扱うことができたが、八王子貯蓄銀行では第三十六銀行との分業で専ら貯蓄預金を吸収していた。同一資本系統の普通銀行を持つ貯蓄銀行の場合、自主運用をほとんどせずに普通銀行への預け金が大きくなる傾向があるが、八王子貯蓄銀行では自主運用の割合が大きかった。貸付や手形割引以外では、関連銀行への第三十六銀行への預け金をおこなった。また、有価証券投資の内訳は不明であるが、第三十六銀行の株式を多数所有している。第三十六銀行の株主名簿によれば、1898年末時点では45株であったが、その後1900年末99株、1903年末225株と徐々に増加し、1907年上期末310株となり第三十六銀行の第五位の株主となった(前掲第2表)¹⁶⁾。

第4表 八王子貯蓄銀行役員一覧(1898年末)

役職	氏名	持株数
頭取	●吉田忠右衛門	54
取締役	●田野倉常蔵	50
取締役	●久保兵蔵	50
取締役	山口安兵衛	50
取締役	●柴田彌市	50
監査役	田野倉淳蔵	不明
監査役	関谷源兵衛	50

出所：東京興信所『銀行会社要録(第3版)』

注：●は第三十六銀行役員。

総株数600株 株主数27人。

田野倉淳蔵の持株数は不明。

15) 協和銀行編『本邦貯蓄銀行史』1969年、35-38、53-57頁。

16) 第三十六銀行『営業報告書』各期。

安田財閥と地方銀行の系列化

第5表 八王子貯蓄銀行主要勘定

年	資本金		積立金	預金		諸貸付金(1)	有価証券	現金・預金	純益金(2)	配当率(年率)3)
	うち払込	うち貯蓄預金								
1898 (明治31) 年下	30,000	7,500	-	12,831	12,831	7,842	1,750	3,445	262	-
1899 (明治32) 年下	30,000	15,000	500	46,752	46,752	33,840	15,412	11,697	1,134	-
1901 (明治34) 年下	30,000	15,000	6,000	77,473	69,680	74,256	23,495	7,484	1,572	-
1902 (明治35) 年下	30,000	15,000	9,500	90,537	82,685	76,380	27,523	12,163	1,759	-
1903 (明治36) 年下	30,000	15,000	12,200	107,087	99,247	70,064	31,651	33,411	1,569	-
1904 (明治37) 年下	30,000	15,000	15,050	108,479	101,257	77,828	33,716	28,175	1,919	-
1905 (明治38) 年下	30,000	15,000	18,300	133,231	125,630	77,917	36,432	53,384	1,932	-
1906 (明治39) 年下	30,000	15,000	21,000	166,819	158,677	72,162	42,641	89,370	1,940	10%
1907 (明治40) 年下	30,000	15,000	23,200	206,769	193,817	115,243	61,040	70,384	2,426	10%
1908 (明治41) 年下	30,000	15,000	25,000	155,500	142,181	96,400	60,819	41,946	4,387	10%
1909 (明治42) 年下	30,000	15,000	26,600	173,604	162,653	92,496	57,776	66,848	2,602	10%
1910 (明治43) 年下	30,000	15,000	28,000	214,882	201,536	80,107	62,581	114,468	3,741	10%
1911 (明治44) 年下	30,000	15,000	30,000	250,596	230,245	85,417	84,566	129,872	998	10%
1913 (大正2) 年下	30,000	15,000	33,000	221,026	196,682	92,044	90,472	87,467	1,656	-
1914 (大正3) 年下	30,000	15,000	34,300	218,615	191,060	100,760	89,186	78,715	1,446	10%
1915 (大正4) 年下	30,000	15,000	35,600	248,986	222,325	83,029	85,821	132,173	2,135	10%
1916 (大正5) 年下	30,000	15,000	28,911	196,437	180,772	73,146	97,348	69,295	7,889	-
1917 (大正6) 年上	30,000	15,000	28,911	232,489	213,254	88,332	119,182	69,621	1,603	10%
1918 (大正7) 年上	30,000	15,000	29,400	281,973	...	146,748	131,809	47,874	2,852	10%
1919 (大正8) 年上	30,000	15,000	30,500	355,819	...	204,177	133,969	66,951	3,168	10%

出所：東京興信所『銀行会社要録』各年版

注：1) 当座貸越・割引手形を含む。

2) 前期繰越金を含む。

3) -は配当率の記載なし。

以上、1900年代の第三十六銀行および八王子貯蓄銀行の経営動向を確認した。節を改めて、1910年代の経営動向と系列化の過程をみることにしよう。

2 経営不振と安田系列銀行へ

(1) 安田銀行への救援要請

1908年2月の預金取付の後、翌1909年末まで預金は停滞し、その後も預金は減少傾向にあった。1912年には預金総額が100万円を下回り、借入金依存も続いた（前掲第1図）。利益金は、1907年までは每期3万円程度を推移していたが、1910年末には2万円程度にまで落ち込み、ROE（自己資本利益率）は年率で7～8%から5.5%へ落ち込み、1900年前後に年率8%であった配当率も最終的には5%となった（別表3）。こうした第三十六銀行の経営不振の背景には、日露戦後の糸価下落にともなう不良債権問題もあったが、その詳細は不明であるが第三十六銀行の役員間の内紛も生じていたという¹⁷⁾。

また、1910年代前半には、第三十六銀行を取り巻く経営環境に大きな変化があった。1910年の八王子第七十八銀行の破産後、第三十六銀行は、八王子そして多摩における最大の銀行となった。一方、1915年12月に、関東地方を中心に支店網を広げつつあった川崎銀行（本店：東京市日本橋区、頭取川崎八右衛門）と関連銀行の川崎貯蓄銀行が八王子町字八日に支店を開設した¹⁸⁾。川崎銀行支店の預金額は判明しないが、資本金100万円、預金4000万円を超える大銀行の支店の進出は第三十六銀行および八王子貯蓄銀行にとっても大きな影響があったと思われる¹⁹⁾。

こうした状況下で第三十六銀行の将来に危機意識を持った株主や関係者

17) 前掲『安田保善社とその関係事業史』466頁。

18) 『銀行会社要録（第23版）』東京府12-13頁。

19) 川崎銀行に関しては、伊牟田敏充「川崎系銀行集団の形成と解体」（『昭和金融恐慌の構造』経済産業調査会、2002年）を参照。

の一部は、結束して経営陣に改革を要求した²⁰⁾。そして、1916年3月、第三十六銀行の経営陣は、安田銀行へ以下の調査依頼書を出し、救援を要請した。

「当銀行は多年当地に於て相当の地歩を占め営業罷在候処数年来多額の回収不能又は回収困難の貸付を生じ此儘に徒過致候は、一般の信用を損じ如何なる運命に立到り候哉も難計候に付断然減資を執行し欠損を補填し尚必要に応じては相当の増資を行ひ恢復致度候へ共当行の独立を以て之を遂行せんか却て世間の疑惑を招き之を動機として取付其他頗ぶる不利益なる事件を誘発し遂に收拾せべからざるに至らん事甚だ憂慮に堪へざるに付従来格別なる御縁故を有する貴行の御援助を以て詳細内容の御調査相願ひ其上にて何分のご配慮を蒙り度貴所及御依頼候也」²¹⁾

依頼書にある安田銀行と第三十六銀行との間の「従来格別なる御縁故」とは、以下の関係を指すと考えられる。第一に、安田銀行と国立銀行時代よりコルレス取引があった点である。1896年末の第三十六国立銀行のコルレス取引先は33箇所であり、そのうち安田系列銀行本支店が8箇所を占めていた（内訳は安田銀行本支店（4箇所）・第三銀行本支店（3箇所）・明治商業銀行本店（1箇所）²²⁾）。このコルレス取引は、普通銀行転換後も継続しており、本支店で安田系列銀行との契約が結ばれている。第二に前述のように安田銀行から季節性の強い製糸資金の融通を受けていた点である。そして、第三に安田系列の企業の株式に投資していた点である。1912年上期末に安田系の帝国製麻の株式（券面5000円・実価7100円）が確認できる²³⁾。こうしたこれまでの資金的な繋がりに加えて、安田の各地の地方銀行の救済実績をみて救援要請したものと思われる。

安田銀行は、調査の結果、以下の結論を出した²⁴⁾。第一に、第三十六銀

20) 前掲『安田保善社とその関係事業史』466頁。

21) 前掲『富士銀行百年史』163頁。

22) 前掲早川「八王子第三十六国立銀行の設立と展開」第3表。

23) 第三十六銀行『第29期営業報告書』。

行の1916年6月30日現在の不良債権額を63万3318円と査定した。第二に、欠損の補填方法を示した。具体的には、資本金を70万円から45万円減資し、その他重役責任弁済金、前期繰越金、諸積立金をあわせて欠損金を全額補填するとした。そして第三に、経営再建のために安田銀行より行員を派遣すること、そして第四に、減資後の資本金25万円から75万円増資して100万円とすることとした。

(2) 安田系列銀行へ

安田銀行の整理方針を踏まえて、1916年7月の株主総会において、①欠損補填のため資本金70万円から25万円への大幅減資を行うこと、②整理決行後、100万円に増資し新株募集についてはまず旧株主に割当、払込不承諾分は全部安田銀行が引き受けること、③係争中の10万2000円の不良債権は控除して清算し、回収の上は旧株1株につき12円、新株1株につき3円を配当することが決定された²⁵⁾。

不良債権の整理を行い、1917年3月の臨時株主総会で、資本金を25万円から一挙に100万円に増資し、保善社副総長・安田銀行監督の安田善三郎が第三十六銀行の筆頭株主となり、頭取に就任した(第6表)。安田善三郎は、善次郎の娘婿であり、1909年に善次郎の後継で安田銀行監督となり、1912年に家督相続した²⁶⁾。新たに常務取締役として安田銀行の支店長や関連銀行の取締役を歴任してきた若菜福朗が就任した²⁷⁾。田野倉常蔵・双木八郎は、取締役として留任し、前頭取吉田忠右衛門は監査役となった。そして安田銀行営業部長、信濃銀行取締役をつとめた鈴木安太郎、

24) 前掲『富士銀行百年史』164頁。

25) 「第三十六銀行減資」『東洋経済新報』第750号、1916年8月

26) 前掲由井『安田善次郎』232、305頁。

27) 若菜福朗は、1860(万延元)年生まれ。1880年、安田銀行に入行し、若松支店長、本店支配人、群馬商業銀行取締役兼支配人を歴任した(『人事興信録(5版)』、前掲由井『安田善次郎』102頁)。

安田財閥と地方銀行の系列化

第6表 第三十六銀行大株主・持株数（300株以上）（2）

1913 年末		1917 年末		1919 年末	
田野倉常蔵	800	安田善三郎	2,000	合名会社保善社	1,600
吉田忠右衛門	610	木村源兵衛	1,000	田野倉常蔵	850
八王子貯蓄銀行	383	渋谷定七	650	吉田忠右衛門	546
平沼伊助	360	八王子貯蓄銀行	600	安田善三郎	500
栗原又七	336	田野倉常蔵	550	安田善之助	500
渋谷定七	333	吉田忠右衛門	486	安田善四郎	500
越智義虎	300			安田善五郎	500
				安田善雄	500
				安田善衛	500
				山口安兵衛	407
				木村源兵衛	400
				天野清	300
総株数	14,000	総株数	20,000	総株数	20,000

出所：第三十六銀行『営業報告書』各期

大蔵省銀行課長，日本興業銀行理事を歴任し保善社秘書役の斎藤恂が新たに監査役に就任した²⁸⁾。

善三郎は，安田銀行監督の他，複数の系列銀行の頭取，系列企業の役員を兼任しており，常務取締役の若菜も明治商業銀行・四国銀行の取締役を兼任していた。そのため第三十六銀行をはじめ系列銀行の実務は安田銀行から派遣された社員が担当した。営業部長（後に取締役兼支配人）として，安田銀行福島支店長などを歴任した山沢平太郎，庶務部長として金山音治が着任した²⁹⁾（第7表）。

なお，第三十六銀行の株式は，当初安田善三郎をはじめとした安田家と

28) 『人事興信録（5版）』

29) 山沢平太郎は，1873年生まれ，安田銀行福島支店長を勤めた（『人事興信録（4版）』）。その後，1919年1月に死去（第三十六銀行『第43回営業報告書』）。金山音治は，1877年生まれ，早稲田大学を卒業後，第三十六銀行を経て，1907年に安田銀行に転じた。後に，安田銀行芝支店長，京城支店長をつとめた（『人事興信録（9版）』）。

第7表 第三十六銀行役員(2)

氏名	住所	1913年末	1915年末	1917年末	1919年末
吉田忠右衛門	八王子市	頭取	頭取	監査役	監査役
田野倉常蔵	八王子市	取締役	副頭取	取締役	取締役
小泉彌左衛門	神奈川県橘樹郡稲田村	取締役	取締役		
天野清	南多摩郡日野町	監査役	監査役		取締役
双木八郎	埼玉県入間郡飯能町	取締役	取締役	取締役	取締役
渋谷定七	八王子市	監査役	監査役		
◎安田善三郎	東京市			頭取	頭取
◎安田善衛	南多摩郡日野町			取締役	取締役
●若菜福朗	東京市			常務取締役	常務取締役
●鈴木安太郎	東京市			監査役	監査役
●斎藤恂	東京市			監査役	監査役

出所：第三十六銀行『営業報告書』各期、『日本全国諸会社役員録』各年版

注：八王子市の発足は1918年。◎安田家、●安田からの派遣役員。

保善社・安田銀行の幹部で所有していたが、1919年末には、安田家の持分は500株ずつ均等となり、現職の第三十六銀行役員をのぞいて善三郎所有株式の一部と社員の株式は保善社名義に変更された(第8表)。こうして、第三十六銀行は、安田系列銀行となり、新しい体制の下で再出発した。

(3) 安田による経営再建と組織再編

1917年6月、第三十六銀行は、『第三十六銀行営業案内』(以下、『営業案内』と略記)を製作し、株主や預金者等に配布した³⁰⁾。『営業案内』は全25頁の冊子で、冒頭に安田善次郎の家訓の一節を掲げ、第三十六銀行の国立銀行以来の沿革、営業時間や預金・貸出金の種類の説明や為替取組、公金の取扱などの業務の概要がまとめられた。そして、本文の最後には、「第三十六銀行と安田系銀行団」と題した節が設けられ、「萬々一此銀行団(=安田系銀行-引用者)中に不測の取付等がありましても、根本から救済の

30) 『第三十六銀行営業案内』(宇津木町高木家文書(補遺)618(八王子市史編さん室所蔵))

安田財閥と地方銀行の系列化

第8表 第三十六銀行の安田関係者の持株

株主名	役職	単位：株数	
		1917 年末	1919 年末
合名会社保善社		—	1600
安田善三郎	保善社副総長・安田銀行監督（善次郎の娘婿）	2000	500
安田善之助	安田銀行頭取（善次郎の長男）	200	500
安田善四郎	安田銀行取締役（善次郎の娘婿）	150	500
安田善五郎	安田銀行取締役（善次郎の三男）	150	500
安田善彌	京都銀行取締役（安田忠兵衛の次男）	150	500
安田善雄	東京火災保険社長（善次郎の四男）	150	500
安田善衛	第三十六銀行取締役（安田忠兵衛の長男）	150	—
安田善助	明治商業銀行頭取（善次郎の甥）	150	—
安田善兵衛	第九十八銀行取締役（善次郎の甥）	150	—
伊臣眞	保善社理事（善三郎の弟・伊臣忠一の次男）	150	—
若菜福朗	第三十六銀行常務取締役・安田銀行協議役	100	100
飯田武也	保善社監督部長・十七銀行監査役	100	—
小笠原鏝次郎	保善社理事・十七銀行・大垣共立銀行取締役	100	—
藪田岩松	安田銀行協議役・東京建物常務取締役	100	—
小倉鎮之助	保善社理事	100	—
永瀧久吉	保善社理事	100	—
山沢平太郎	第三十六銀行営業部長	100	100
金原磊	明治商業銀行常務取締役	100	—
金山音治	第三十六銀行庶務部長	100	—
鈴木安太郎	安田銀行営業部長兼信託部長	100	100
櫻井梅太郎	安田商事主事・京浜電気鉄道取締役	100	—
齊藤恂	保善社秘書役	100	100
甲能順	共済生命支配人兼営業部長	100	—
菅原大太郎	第三銀行営業部長	100	—
近藤重三郎	安田銀行庶務部長・第九十八銀行取締役	100	—
佐藤小一郎	明治商業銀行取締役兼営業部長	100	—
関係者持株数		5000	5000
総株数		20,000	20,000
総株主数		450	455

出所：第三十六銀行『営業報告書』各期、『人事興信録（5版）』、『日本全国諸会社役員録』各年版

道が講じてあって、厘毛も御得意に損耗を懸けませんから、十分御安心出来得ることと自信致します」と結ばれており、第三十六銀行が安田系列銀行として再出発したことを強調している。このように第三十六銀行は、1917年1月現在で全国17行、190支店(資本金4355万円、積立金2020万円、預金2億6170万円、貸付金2億3170万円)を擁する安田系銀行団の一員となった(第9表)。

安田系列銀行となった後の第三十六銀行の経営動向をみよう(前掲第1図)。預金額は、60万円台にまで落ち込んでいたが、1917年以降折からの第一次世界大戦の好景気の影響もあって急増し、1919年末には450万円

第9表 安田系列銀行一覧(1917年1月)

金額：万円				
銀行名	本店所在地	資本金	支店数	頭取
安田銀行	東京	1,000	21	安田善之助
第三銀行	東京	500	13	安田善四郎
明治商業銀行	東京	480	13	安田善助
肥後銀行	熊本	200	8	安田善三郎
京都銀行	京都	100	5	安田善彌
日本商業銀行	神戸	600	8	安田善三郎
百三十銀行	大阪	500	25	安田善三郎
二十二銀行	岡山	120	9	安田善三郎
十七銀行	福岡	125	4	安田善三郎
第九十八銀行	千葉	50	10	奥山三郎
根室銀行	根室	50	8	安田善五郎
高知銀行	高知	200	19	安田善三郎
信濃銀行	長野	300	12	安田善三郎
大垣共立銀行	大垣	120	17	安田善三郎
正隆銀行	大連	300	8	安田善三郎
第三十六銀行	八王子	100	3	安田善三郎
金城貯蓄銀行	東京	10	7	安田善助
17行		4,355	190	

出所：『第三十六銀行営業案内』（宇津木町高木家文書（補遺）618（八王子市史編さん室所蔵））

安田財閥と地方銀行の系列化

に到達した。この間には、前掲の『営業案内』で示されているように、「今後業務の発展に伴ひ、追々営業所を増設し大に金融界に貢献する所存」であるとし1917年9月には、大宮支店（埼玉県北足立郡大宮町）を新設し、店舗網を拡張した³¹⁾。そして資金運用面では、預金の増加に伴い、貸付金が平行に増加した。利益金も増加し、1919年末には5万円を超え、ROEも10%台を推移するようになり、配当率も1919年には年率10%となった（別表2）。

関連銀行の八王子貯蓄銀行は、安田系列銀行となっておらず、1918年末の筆頭株主は吉田忠衛門（600株中80株所有）であり頭取を継続していた³²⁾。貯蓄預金を貸付と有価証券を中心に運用し、利益金の金額とは無関係に年率10%の配当を継続し、1916年には欠損を出している（前掲第4表）。安田善次郎は、他の財閥系銀行をはじめとする都市銀行と同様に零細預金を取り扱う貯蓄銀行の経営に消極的であったというが、第一次大戦期にはそれを発展させていく方針に転じた。1919年に安田系列の金城貯蓄銀行が中加貯蓄銀行、八王子貯蓄銀行を相次いで合併し、翌年には安田貯蓄銀行と改称し、その後有力貯蓄銀行に発展していった³³⁾。

この間、1917年9月、八王子は東京市に次いで東京府で二番目となる市政施行した。市内では、1917年7月には折からの経営不振により鴻通銀行が任意解散し、そして前述のように1919年に八王子貯蓄銀行が金城貯蓄銀行に合併されると、第三十六銀行が八王子市内に本店を置く唯一の銀行となった。

おわりに

本稿では、第三十六銀行を事例に、八王子の地元資本による地方銀行か

31) 第三十六銀行『第40期営業報告書』

32) 『銀行会社要録（23版）』東京府6頁。

33) 前掲浅井「安田貯蓄銀行と安田財閥」、前掲『安田財閥』322-323頁。

ら安田系列銀行となる過程について考察した。本稿で明らかになったことを整理しておこう。

第三十六銀行は、国立銀行から転換した直後は、資金源泉の中心が預金ではなく、自己資本と多額の借入金に依存しながら資金需要に応じていた。安田との関係は国立銀行時代からあったが、この時期季節資金の融通を得るなど、より強化されている。その後、預金銀行化は進展したが、日露戦後の八王子第七十八銀行の破綻の余波により取付を受け、経営不振に陥った。そして、自力での整理を断念し、従来から資金的関係のあった安田財閥の傘下となり、不良債権の整理を行い、存続をはかった。安田による経営再建のタイミングは、第一次世界大戦による好況期にあり、業績は急速に回復していった。

その後、第三十六銀行は、1920年代以降も、1923年の安田の大合併には組み込まれず、五日市銀行の合併や店舗網の拡大を図りながら1942年まで安田傘下の多摩の有力地方銀行として活動していく。1920年代以降の分析については、別の機会に検討することにした。

【謝辞】

本稿の基礎となった『新八王子市史』通史編5 近現代(上)の史料収集に関しては、八王子市史編さん室のスタッフの皆さまにお世話になりました。末筆ながら感謝いたします。

安田財閥と地方銀行の系列化

【別表1】 第三十六銀行主要勘定

年	期	主要負債勘定			
		資本金	うち払込 a	諸積立金 b	預金
1898 (明治31) 年上	1	700,000	550,000	—	194,463
1898 (明治31) 年下	2	700,000	550,000	3,240	311,183
1899 (明治32) 年上	3	700,000	550,000	...	531,880
1899 (明治32) 年下	4	700,000	550,000	13,145	716,539
1900 (明治33) 年上	5	700,000	550,000	16,145	806,478
1900 (明治33) 年下	6	700,000	550,000	15,255	747,384
1901 (明治34) 年上	7	700,000	700,000	30,145	673,033
1901 (明治34) 年下	8	700,000	700,000	35,145	656,765
1902 (明治35) 年上	9	700,000	700,000	40,645	559,585
1902 (明治35) 年下	10	700,000	700,000	44,985	503,137
1903 (明治36) 年上	11	700,000	700,000	49,360	450,691
1903 (明治36) 年下	12	700,000	700,000	53,110	449,592
1904 (明治37) 年上	13	700,000	700,000	57,030	551,448
1904 (明治37) 年下	14	700,000	700,000	60,780	588,929
1905 (明治38) 年上	15	700,000	700,000	64,580	536,091
1905 (明治38) 年下	16	700,000	700,000	68,400	642,266
1906 (明治39) 年上	17	700,000	700,000	72,600	681,072
1906 (明治39) 年下	18	700,000	700,000	64,210	652,648
1907 (明治40) 年上	19	700,000	700,000	68,710	735,725
1907 (明治40) 年下	20	700,000	700,000	73,060	1,199,697
1908 (明治41) 年上	21	700,000	700,000	74,060	1,023,614
1908 (明治41) 年下	22	700,000	700,000	77,060	1,010,289
1909 (明治42) 年上	23	700,000	700,000	80,810	946,454
1909 (明治42) 年下	24	700,000	700,000	84,160	1,008,643
1910 (明治43) 年上	25	700,000	700,000	88,360	1,154,036
1910 (明治43) 年下	26	700,000	700,000	89,735	1,387,756
1911 (明治44) 年上	27	700,000	700,000	92,935	1,298,384
1911 (明治44) 年下	28	700,000	700,000	96,135	1,213,695
1912 (明治45) 年上	29	700,000	700,000	99,535	949,171
1912 (大正元) 年下	30	700,000	700,000	103,035	926,962
1913 (大正2) 年上	31	700,000	700,000	106,535	873,846
1913 (大正2) 年下	32	700,000	700,000	110,035	978,880
1914 (大正3) 年上	33	700,000	700,000	110,235	941,597
1914 (大正3) 年下	34	700,000	700,000	113,735	884,559
1915 (大正4) 年上	35	700,000	700,000	117,235	910,884
1915 (大正4) 年下	36	700,000	700,000	120,735	855,924
1916 (大正5) 年上	37	700,000	700,000	124,235	545,253
1916 (大正5) 年下	38	250,000	250,000	0	637,640
1917 (大正6) 年上	39	1,000,000	437,500	1,400	1,190,292
1917 (大正6) 年下	40	1,000,000	437,500	3,400	1,540,586
1918 (大正7) 年上	41	1,000,000	437,500	5,400	2,166,996
1918 (大正7) 年下	42	1,000,000	437,500	7,400	2,937,985
1919 (大正8) 年上	43	1,000,000	437,500	9,900	3,626,862
1919 (大正8) 年下	44	1,000,000	625,000	13,400	4,579,650
1920 (大正9) 年上	45	1,000,000	1,000,000	23,200	5,663,643
1920 (大正9) 年下	46	1,000,000	1,000,000	33,200	6,451,692

出所：第三十六銀行『営業報告書』各期、決算公告

安田財閥と地方銀行の系列化

単位：円

諸借入金	当期純益金	主要資産勘定			資産 = 負債計
		貸付金	有価証券	現金・預ケ金	
106,662	22,963	669,025	137,011	58,667	1,062,616
75,607	30,617	757,325	133,007	91,334	1,182,343
392,255	30,644	1,268,331	133,204
616,577	30,706	1,679,640	143,300	88,732	2,148,882
607,369	26,987	1,788,840	139,873	169,723	2,222,682
473,477	36,169	1,684,900	139,873	99,421	2,045,375
583,528	32,885	1,781,600	139,523	3,136	2,051,008
600,069	33,939	1,805,435	141,921	101,306	2,105,681
219,962	30,610	1,351,509	131,953	86,685	1,630,769
293,364	31,107	1,335,495	107,702	115,976	1,638,031
145,410	26,621	1,219,578	67,067	69,015	1,446,702
130,767	27,896	1,202,825	62,258	90,726	1,454,545
257,258	26,262	1,397,085	65,106	71,413	1,616,892
231,757	26,745	1,382,428	75,716	73,175	1,654,946
191,056	27,009	1,334,348	92,855	46,936	1,561,264
564,407	29,228	1,814,496	70,655	150,410	2,113,006
231,372	30,169	1,536,648	38,374	91,763	1,764,754
377,247	34,576	1,639,802	44,774	165,774	1,939,646
325,304	33,517	1,712,843	39,096	81,101	1,912,229
723,186	34,114	2,553,547	39,096	130,558	2,824,431
648,490	26,136	2,231,011	60,677	136,923	2,507,890
801,798	30,167	2,332,674	61,426	174,243	2,716,984
207,397	26,429	1,675,798	89,257	164,725	2,012,982
138,935	31,723	1,743,505	89,170	10,708	2,031,206
98,377	28,117	1,771,546	68,247	199,420	2,137,623
196,612	26,846	2,047,876	147,432	219,411	2,515,858
142,038	25,849	1,928,157	154,128	160,796	2,335,220
446,110	26,118	2,089,563	150,745	222,261	2,581,254
384,619	26,986	1,856,058	148,628	153,508	2,239,069
571,882	27,077	2,031,935	145,176	133,816	2,437,477
378,389	26,709	1,900,010	145,867	129,825	2,267,322
440,975	29,794	1,811,518	144,542	260,621	2,319,154
179,400	29,229	1,685,395	144,126	122,891	2,028,986
392,834	28,292	1,809,624	142,448	162,440	2,196,797
186,000	28,506	1,635,522	141,548	122,819	1,983,202
311,463	28,728	1,698,072	142,798	155,117	2,089,803
430,478	-627,689	805,513	154,706	98,772	1,846,354
245,000	8,906	965,939	136,146	77,239	1,259,830
200,000	16,095	1,535,433	251,373	233,905	2,552,594
100,000	18,053	1,796,703	251,373	152,020	2,894,035
300,000	20,944	2,605,709	290,913	186,967	3,769,040
—	24,972	3,027,576	308,020	367,368	4,392,239
750,000	33,489	4,412,644	282,165	461,242	5,872,245
180,000	60,439	5,151,390	285,866	589,884	6,585,825
—	36,209	5,896,846	294,096	721,376	7,129,600
50,000	118,424	7,190,256	292,115	474,335	8,184,814

【別表 2】 第三十六銀行利益金処分

年	期	利益金	利益金	
			当期純益金	前期繰越金
1898 (明治 31) 年上	1	22,962	22,446	516
1898 (明治 31) 年下	2	31,376	30,693	683
1899 (明治 32) 年上	3	30,644	29,899	745
1899 (明治 32) 年下	4	29,100	27,856	1,244
1900 (明治 33) 年上	5	29,087	26,987	2,100
1900 (明治 33) 年下	6	38,157	36,070	2,087
1901 (明治 34) 年上	7	31,286	29,500	1,786
1901 (明治 34) 年下	8	35,726	33,940	1,786
1902 (明治 35) 年上	9	32,836	30,610	2,226
1902 (明治 35) 年下	10	33,004	31,108	1,896
1903 (明治 36) 年上	11	30,750	26,621	4,129
1903 (明治 36) 年下	12	29,197	27,797	1,400
1904 (明治 37) 年上	13	28,289	26,262	2,027
1904 (明治 37) 年下	14	27,931	26,745	1,186
1905 (明治 38) 年上	15	28,140	27,009	1,131
1905 (明治 38) 年下	16	30,549	29,228	1,321
1906 (明治 39) 年上	17	33,218	30,169	3,049
1906 (明治 39) 年下	18	34,576	30,908	3,668
1907 (明治 40) 年上	19	33,517	30,341	3,176
1907 (明治 40) 年下	20	34,114	31,997	2,117
1908 (明治 41) 年上	21	26,136	23,622	2,514
1908 (明治 41) 年下	22	30,167	26,481	3,686
1909 (明治 42) 年上	23	26,429	23,412	3,017
1909 (明治 42) 年下	24	31,723	28,444	3,279
1910 (明治 43) 年上	25	28,117	23,994	4,123
1910 (明治 43) 年下	26	26,846	21,829	5,017
1911 (明治 44) 年上	27	25,849	21,703	4,146
1911 (明治 44) 年下	28	26,118
1912 (明治 45) 年上	29	26,986	23,918	3,068
1912 (大正元) 年下	30	27,077	23,291	3,786
1913 (大正 2) 年上	31	26,709	22,932	3,777
1913 (大正 2) 年下	32	29,794	26,285	3,509
1914 (大正 3) 年上	33	29,229	23,215	6,014
1914 (大正 3) 年下	34	28,292	22,243	6,049
1915 (大正 4) 年上	35	28,506	23,394	5,112
1915 (大正 4) 年下	36	28,728	23,402	5,326
1916 (大正 5) 年上	37	-627,689	—	—
1916 (大正 5) 年下	38	8,906	8,906	—
1917 (大正 6) 年上	39	16,095	15,639	456
1917 (大正 6) 年下	40	18,052	16,707	1,345
1918 (大正 7) 年上	41	20,944	19,517	1,427
1918 (大正 7) 年下	42	24,972	22,840	2,132
1919 (大正 8) 年上	43	33,489	30,517	2,972
1919 (大正 8) 年下	44	60,439	52,637	7,802
1920 (大正 9) 年上	45	86,209	66,695	19,514
1920 (大正 9) 年下	46	118,424	88,965	29,459

出所：第三十六銀行『営業報告書』各期、決算公告

安田財閥と地方銀行の系列化

単位：円

諸積立金	利益金処分			ROE (年率)	配当性向	配当率 (年率)
	役員賞与	配当金	後期繰越			
3,240	1,700	14,625	683	8.2%	65.2%	6%
4,480	2,450	22,000	745	11.1%	71.7%	8%
4,800	2,600	22,000	1,244	10.7%	73.6%	8%
5,000	—	22,000	2,100	9.9%	79.0%	8%
5,000	—	22,000	2,087	9.8%	81.5%	8%
7,000	—	28,000	3,257	12.8%	77.6%	8%
5,000	—	24,500	1,786	8.1%	83.1%	7%
5,500	—	28,000	2,226	9.2%	82.5%	8%
4,340	—	26,600	1,896	8.3%	86.9%	7.6%
4,375	—	24,500	4,129	8.4%	78.8%	7%
3,750	2,500	23,100	1,400	7.1%	86.8%	6.6%
3,920	2,350	21,000	2,027	7.4%	75.5%	6%
3,750	2,350	21,000	1,186	6.9%	80.0%	6%
3,800	2,000	21,000	1,131	7.0%	78.5%	6%
3,820	2,000	21,000	1,321	7.1%	77.8%	6%
4,200	2,300	21,000	3,049	7.6%	71.8%	6%
4,350	2,450	22,750	3,668	7.8%	75.4%	6.5%
4,500	2,400	24,500	3,176	8.1%	79.3%	7%
4,350	2,450	24,500	2,117	7.9%	80.7%	7%
4,500	2,600	24,500	2,514	8.3%	76.6%	7%
3,000	1,950	17,500	3,686	6.1%	74.1%	5%
3,750	2,400	21,000	3,017	6.8%	79.3%	6%
3,350	2,300	17,500	3,279	6.0%	74.7%	5%
4,200	2,400	21,000	4,123	7.3%	73.8%	6%
3,500	2,100	17,500	5,017	6.1%	72.9%	5%
3,200	2,000	17,500	4,146	5.5%	80.2%	5%
…	…	17,500	…	5.5%	80.6%	5%
3,400	2,150	17,500	3,068	—	—	5%
3,500	2,200	17,500	3,786	6.0%	73.2%	5%
3,500	2,300	17,500	3,777	5.8%	75.1%	5%
3,500	2,200	17,500	3,509	5.7%	76.3%	5%
3,000	2,280	17,500	6,014	6.5%	66.6%	5%
3,500	2,180	17,500	6,049	5.7%	75.4%	5%
3,500	2,180	17,500	5,112	5.5%	78.7%	5%
3,500	2,180	17,500	5,326	5.7%	74.8%	5%
3,500	2,200	17,500	5,528	5.7%	74.8%	5%
—	—	—	—	—	—	—
1,400	800	6,250	456	7.1%	70.2%	5%
2,000	1,500	11,150	1,345	7.1%	71.3%	6%
2,000	1,500	13,125	1,427	7.6%	78.6%	6%
2,000	1,500	15,312	2,132	8.8%	78.5%	7%
2,500	2,000	17,500	2,972	10.3%	76.6%	8%
3,500	2,500	19,687	7,802	13.6%	64.5%	9%
9,800	3,000	28,125	19,514	16.5%	53.4%	10%
10,000	3,000	43,750	29,459	13.0%	65.6%	10%
21,800	5,000	50,000	41,624	17.2%	56.2%	10%